

優秀賞論文要旨

〈男装の少女〉のセクシュアリティ

— 少女マンガ世界におけるジェンダー表象 —

原 田 薫

〈男装の少女〉というモチーフは、マンガの歴史において、長きに渡り人々を惹きつけてきた。その中でも、男性上位のジェンダー観が浸透した社会においては、社会的地位の最も低い〈少女〉向けの作品、つまり〈少女マンガ〉における〈少女の異性装〉が最もメッセージ性の強いものであるだろう。年代別に50年代の『リボンの騎士』（手塚治虫、講談社、1953-1956）、70年代の『ベルサイユのばら』（池田理代子、集英社、1972-1973）、90年代の『少女革命ウテナ』（幾原邦彦・ビーバパス、テレビ東京、1997）の3作品を取り上げる。そして、作品における男装の少女の描かれ方の違いを、外見的特徴、対人関係の描写、セクシュアリティ描写の3つに焦点を当て、考察する。そして、そこに窺うことの出来るジェンダー観やセクシュアリティの変化、更には作品が提示する主題について検討したい。

50年代に描かれた『リボンの騎士』では、男装少女であるサファイアの〈性別越境〉は〈服装〉のみに留まり、キャラクターの性質が最も表れる〈顔の造形〉において彼女に〈男性性〉が付与されることはなかった。他登場人物との関係描写では、男性キャラクターであるフランツとの関係性が重点的に描かれ、彼女の〈女性性〉が強調された。女性キャラクターとの絡みは描かれず、〈服装〉以外において彼女の〈男性性〉が積極的に描かれることはなかった。そして、〈男装の少女〉を待つ結末として提示されたのは〈結婚〉=〈女の幸せ〉だとされるものであった。それは、〈既存のジェンダー観への回帰〉を意味し、

彼女の〈性別越境〉の試みは終結した。

70年代に描かれた『ベルサイユのばら』で男装少女オスカルは、〈服装〉に限定されず、〈顔の造形〉も女性キャラクターと差異化され〈中性的〉なキャラクターとして描かれた。他者との関係性描写においても、ある程度の〈女性性表象〉もみられたが、〈恋愛〉として描かれたアンドレとの関係は、ジェンダー規範に囚われないものであった。しかし、自律した存在である〈人間〉としての彼女のアイデンティティは、〈死〉を以って聖域化されなければならないものとされた。

90年代の作品である『少女革命ウテナ』では、ウテナの〈男装〉は服装レベルに留まっており、〈サファイア型〉の男装少女であるように見えた。だが、作品の根底に見られるセクシュアリティ表象は大きな違いを見せた。そこには、男／女というジェンダーに囚われない、多様なセクシュアリティがあった（ゲイ、レズビアン、近親相姦といったタブーとされていたセクシュアリティ表象が特異なものとしてではなく、淡々と描かれている）。また、作中において、男女の〈恋愛〉が中心となることはなく、ウテナとアンシーの〈友情〉と呼ばれるような関係が深く描かれた。そこで示されるのは、それまで多くの少女マンガが発信してきた〈恋愛至上主義〉的なメッセージではなかった。

このように、少女マンガにおける〈男装の少女〉のジェンダー／セクシュアリティ表象は、時代と共に大きく変化してきた。そして、『少女革命ウテナ』誕生以降の少女達は、最早「女らしさ」「男らしさ」という言葉で簡単に括ることの出来ない、多様なセクシュアリティが許容されつつある社会に生きている。多様さが生まれるということは、単純に「生きやすい世の中」になったことを示すのではない。〈多様さ〉は、同時に人々に〈選択〉を迫る。少女達は自己のセクシュアリティを自らの手で掴み取らなければならないのだ。少女達が互いに影響を与え、自己のセクシュアリティに革命を起す『少女革命ウテナ』という物語……それは、視聴者の少女に〈革命〉という名のバトンを渡す物語であったのだ。